

## 22. 馬戸窯跡・釜屋谷窯跡

うま と かまあと かま や たにかまあと

所在地：越前町熊谷

調査原因：越前窯跡発掘調査事業

調査期間：平成26年5月12日～7月11日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：65 m<sup>2</sup>

時代：室町



位置図 (S=1/50,000)

**調査の概要** 福井県教育委員会では、中世六古窯の一つで福井県を代表する伝統工芸品である越前焼の歴史的な価値を証明し、文化的側面から産業力強化を図る目的で、越前焼の調査研究を行っています。その一貫として各時代の特徴的な窯の試掘調査を実施しています。今年度は窯構造が不明な室町時代の前・中期の2箇所の窯跡で調査を実施しました。

**遺構** 中世の越前焼の窯は、傾斜地を掘り抜いて作る窯です。基本的には、燃料を燃やす燃焼部、製品を焼成する焼成部と排煙施設の煙道部で成ります。燃焼部と焼成部との境には分焰柱、焚口の後方には作業場の前庭部、更に後方には欠損品を廃棄する灰原があります。

**【馬戸窯跡】** 現況は山林で、分布調査で5基程の窯跡を確認しました。調査は、焼成部と煙道部の陥没が顕著な1号窯で行いました。

調査の結果、窯体の規模は、焚口幅2m、焼成部最大幅約2.8mを測り、全長は分焰柱を確認できなかったため、約12.5mと推定できました。規模的には鎌倉時代の窯と比べ大差のないことが分かりました。

**【釜屋谷窯跡】** この窯跡は南北朝時代・室町時代中期の2時期の操業が認められますが、調査は室町時代中期の窯の中でも、焼成部が陥没して空洞化した1号窯を対象に行いました。

調査の結果、焼成部先端と煙道部、前庭部や灰原を検出しました。焼成部の幅は、検出部分で約2.5mを測り、馬戸窯跡に比べて大型化が顕著でした。床面の傾斜角も約40°を測り急です。焼成部と煙道部の境界は焰を絞るため、一度狭まりますが、煙道部で再び広がり、最大幅は約2mを測ります。

注目すべきは、前庭部で検出した被熱した耐火石です。これは、全長24mを測る16世紀の大窯である岳の谷窯跡において分焰柱の構築材等に用いられています。先述した床面の急傾斜化や、耐火石の使用は、窯の大型化に伴う改良と考えられます。

**遺物** 甕と播鉢が主体ですが、製品を焼成部に置く際に用いる焼台もありました。馬戸窯跡の遺物は14世紀後半頃、釜屋谷窯跡の遺物は15世紀後半の特徴が認められました。

**まとめ** 今回の調査で、越前窯は14世紀後半までは著しい規模の変化はみられませんが、その後、大型化が顕著になることが判明しました。この動向は、全国的な越前焼の流入量の増加とも一致するもので、生産地と消費地の関係を示す貴重な成果です。(木村孝一郎)



写真1 馬戸窯跡 1号窯全景 No1



写真2 馬戸窯跡 1号窯全景 No2



写真3 馬戸窯跡 1号窯焚口 No1



写真4 馬戸窯跡 1号窯焚口 No2



写真5 釜屋谷窯跡 1号窯前庭部 No1



写真6 釜屋谷窯跡 1号窯前庭部 No2



写真7 釜屋谷窯跡焼成・煙道部 No1



写真8 釜屋谷窯跡焼成・煙道部 No2